秋田駒ケ岳（男岳～笹森山～乳頭温泉）

1994. 3. 19
（快晴）

参加者　　L　岡坂　準一
　　馬場　修爾
　　山崎　義男

全国的に移動性高気圧に覆われた３／２１、ここ秋田駒ケ岳も風もなく絶好の山スキー日和であったが、同行予定の作野氏は我々の連絡不徹底が原因で合流することができず、作野氏はツアーに参加できなくたいへん申し訳ないこととなってしまった。

８：３０に秋田駒ケ岳のゲレンデ駐車場に馬場氏の車で着いた。作野氏を捜してみたが見当たらない。作野氏は何か急用で来れなくなったのかと勝手に判断し、我々３人で出発する。１，５００ｍの高速クワットリフト、高原ロマンスリフトと２本のリフトを乗り継ぎ標高１，２００ｍ地点へ下り立った。登山計画書をリフト係員に提出し、９：３０にシールを付け出発する。快晴だが、登山者は我々の他１パーテイ５名のみである。標高差にして２００ｍ程登った地点でアイゼンにはきかえる。ガイドブック等にはこのルートは、ピッケル、アイゼンが必要と記してあったが、其ほどの急峻な痩せ尾根でなかった。アイゼンは必要だが取り立てて危険な斜面ではなくピッケルが必要というのはオーバーだと思う。１１：００山頂着。田沢湖の青い湖面がスキー場下に良く見える。快晴で風もなく暖たかいので１時間も山頂でのんびりしてしまった。先に登ったパーテイと雑談する。彼らから（銀座山の会とのこと。）山岳会を聞かれたので山スキー同志会と答えると、「岡坂さんという人はいるか」との質問にビックリ。尋ねた人は、ラネージュ３号を読んでいて私が白馬乗鞍で雪崩にあって埋まったことが印象に残っていたのだつた。雪崩に遭遇した印象を聞かれたので当会では、私の雪崩事故以来山行に必ずスノースコップを携帯するようになったことを教訓として話をしておいた。吾妻の遭難の教訓からも雪山では、ツエルト、スノースコップは必ず携帯する必要があると思う。さらに最近ではトランシーバーもパーテイに１台は必要な装備ではないかと考える。特に今回御一緒している馬場さんのように単独行の多い人絶対に必要ではないかと考える。男岳よりは北へ稜線をシールを外し滑るというより歩く感じで女目岳方面の急斜面にでる。所々アイスバーンの急斜面で馬場さんがスリップして少し流されたが幸い雪の柔らかい所で止まり大事には至らなかった。阿弥陀の避難小屋で一休み後、無木立の女目岳めざしてふたたびシール登行を続け山頂まで 15 分で登った。狭い山頂で２パーテイ８名の登山者が登っていた。展望は最高だ。コンロで鍋を楽しむパーテイもいる。本ツアーコースの中では、この女目岳直下の斜面が斜度、雪質といい今山行では最高で各自思いのままのシュプールを描くことができた。

女目岳直下より谷状の斜面を左に回り込み８合目避難小屋めざして滑りおりた。途中、高原スキー場よりの大パーテイ（２０名前後）に会ったがこちらからのルートは、男岳より登るルートと比べ少し歩く距離は長いがアイゼンが必要なく、シール登行のみで登れるのが長所だ。シュカブラ状の雪質の中を滑り降り避難小屋には寄らず笹森山の取付点の雪に覆われた沢で再びシールを張り笹森山への斜面を登る。当初、山頂直下をトラバースして滑ろうかとも思ったがトラバースルートは大きな雪庇が張り出しており危険なので山頂まで登る。笹森山山頂はドーム状の頂でこれから下山する予定の乳頭スキー場の赤いレストハウが良く見える。直下は急な斜面だが後は顕著な尾根でなく平坦な森のような尾根だ。今日のように視界がいいとルートファインデイングもやさしい。それに所々に赤布もある。笹森山よりは午後の日差しで雪が柔らかくなってきて実に滑りづらい雪質だったが、ぶな林の中を乳頭スキー場に滑りこんだ。

（岡坂記）

参考コースタイム

リフト終点	男岳山頂	阿弥陀池避難小屋
9:30	11:00～12:00	12:15～12:30
女目岳	笹森山山頂	乳頭スキー場
12:45 ～13:00	14:00～14:15	15:30

反省点

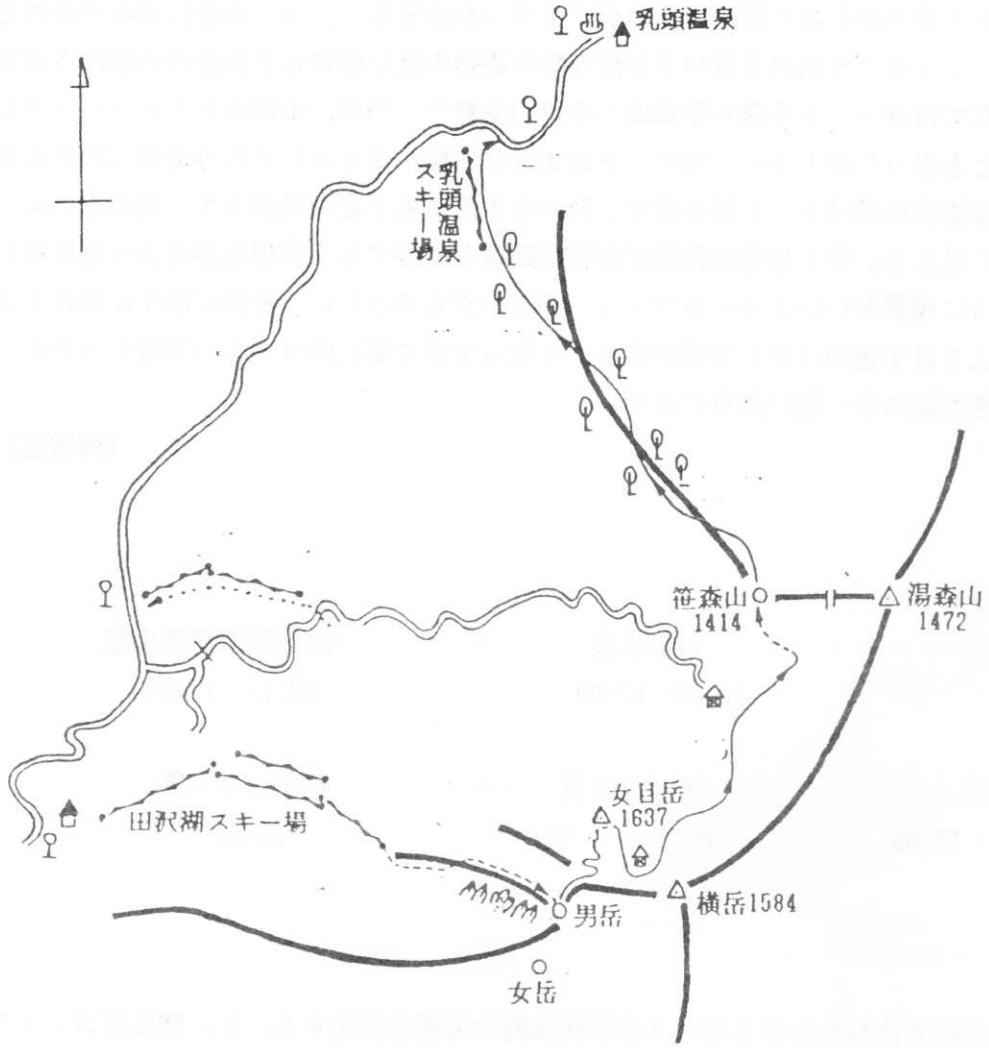
スキー場にて待ち合わせる場合は必ず具体的な場所を指定すること。例えばゴンドラリフト乗場前とか、パトロール事務所前とか、ハツキリと分かる場所を連絡する事。

今回作野氏と会えなかったのは、我々が盛岡から田沢湖スキー場までを列車から急遽作野氏に連絡せず車に変更したためである。

作野さんは、我々が列車で来るものと思い列車が着く時間にあわせてバス亭で待っていたため、合流できなかった訳です。

作野さん大変申し訳ありませんでした。お詫び申し上げます。

ルート概念図


乳頭温泉
乳頭温泉スキー場
笹森山
1414
湯森山
1472
女目岳
1637
田沢湖スキー場
男岳
横岳1584
女岳